

受け継がれたもの  
-アーネスト・ヘミングウェイの遺伝疾患について-  
Inheritance  
-On genetic illnesses of Ernest Hemingway-

坂田 雅和  
SAKATA Masakazu

---

**Abstract** Using two collections of Ernest Hemingway's short stories, *In Our Times* (1925) and *Nick Adams Stories* (ed. Philip Young, 1972), this paper intends to analyze the author's experiences and the inheritances that were passed down to him through the generations on the basis of prior research. Hemingway's experiences are recorded in various books written by numerous researchers. However, his inheritances across generations are only occasionally observed.

This paper also sheds light on Hemingway's experiences and elucidates the influence exerted on his work by inheritances such as mental illnesses. And I focus on what kind of influences he had on the expressions in the work in which inheritances were drawn.

Further, the present investigation contemplates the effects resulting from the corporal punishment meted by the author's parents. Finally, the current study verifies medical facts and clarifies the structure of Hemingway's inheritances and their association to the texts to attempt to elucidate Hemingway's consciousness as an author hidden behind the cross-disciplinary corpus of his work.

---

**Key words** Ernest Hemingway, *In Our Times*, inheritance, *Nick Adams Stories*, corporal punishment,

アーネスト・ヘミングウェイ、我らの時代に、ニック・アダムズ物語、遺伝、体罰

---

はじめに

フロンティアの消滅から狂騒の 1920 年代へ、アメリカの大いなる繁栄の時代が始まった頃、1899 年 7 月、イリノイ州オークパークにヘミングウェイが生まれた。その頃のオークパークは、ジェイムズ・バンディー (James F. Bandy) によれば、「アメリカの中西部、シカゴの西、約 16

キロにあるオークパークも例外ではなく、著しく発展し人口も約 3.5 倍になっていた」(Bundy, *Fall from Grace* 90) とある。

Between the years 1899 and 1920, neither religion nor the social order in Oak Park were static. During these two decades of rapid growth and change, Oak Park grew from a small town of 10,000 in 1900 to a city of 35,000 in 1917. (Bundy, *Fall from Grace* 90)

1892 年の国勢調査で、フロンティアの消滅が公式に宣言されたが、文字通りの消滅ではなく文明に侵され消えゆく時代であった。その辺境をこよなく愛し、描き続けたヘミングウェイの初期の作品に光をあて、彼の体験した出来事と世代を渡る「遺伝」について先行研究を踏まえて考察する。ヘミングウェイの体験した出来事は様々な書物に書かれている。しかし世代を渡る「遺伝」については言及がない。

本稿は、ヘミングウェイの体験した出来事と、世代間で受け継がれた精神疾患を含む「遺伝」が、作品にどのような影響を与えて描き込まれたのか、また描かれた作品の中の表現にどのような影響を及ぼしたのかを中心に考察し明らかにするのが目的である。医学的見地から検証された事実とともに領域横断的にテキストとの構造を明らかにし、作品の根底に隠された作者ヘミングウェイの意識にも焦点をあててみたい。主に 1925 年に出版された短編集『我らの時代に』(*In Our Times* 1925 年)、『ニック・アダムズ物語』(*Nick Adams Stories* 1972 年)を中心に再読し作品の中の潜む両親からの影響も併せて考察を試みる。

ヘミングウェイの後半の人生を振り返ると、40 代が大きな転機の時期だったと考えられる。40 歳で『他が為に鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls* 1940) を出版して以来、51 歳に『河を渡って木立の中へ』(*Across the River and Into the Trees* 1950) まで、わずかな雑誌などへの寄稿を除き、作品は発表されていない。1942 年、43 年は執筆活動らしきこともしていない。43 年の夏、友人のアーチボルト・マクリーシュ (Archibald Macleish) に、この 1 年の間一行も書いていないと書き送っている (*Letters* 549)。同じ頃、カルロス・ベーカー (Carlos Baker) がヘミングウェイは、その夏深刻な飲酒生活にもどったと指摘している (Baker, *Life Story* 579)。

過度の飲酒については、ヘミングウェイとポーリンとの間の子、当時 12 歳のグレゴリーが「ここ数年信じられないほどの飲酒をしていて、たとえば、午前 10 時からウイスキーのソーダ割り、ウォッカベースのアルコール度数の高いブラッディ・マリーなどを飲み始めていた」とインタビューに答えている (qtd. in Dearborn 440)。3 度目の妻マーサによれば、その挙句、毎日同じ服を着て、風呂にも入らず、街を裸足で歩いていたということである (qtd. in Dearborn 442)。44 年以降は、飲酒運転で度重なる交通事故を起し、重度の脳震盪で後遺障害に苦しみ、さらに高血圧症でも苦しむことになる。

この時代を含めてヘミングウェイの結婚生活を簡単に振り返えてみる。1921 年 9 月、エリザベス・ハドリー・リチャードソンと結婚。27 年 4 月、離婚。同年 5 月、ポーリン・ファイファーと結婚。40 年 11 月、ポーリンと離婚。同月、マーサ・ゲルフォーンと結婚。45 年 12 月、マーサと離婚。46 年 3 月、メアリー・ウェルシュ・ヘミングウェイと結婚する。ヘミングウェイの結婚もまさに波瀾に富んだものであった。

40 代の過度の飲酒などの不摂生による体調不良、度重なる事故による脳震盪の影響も、50 代に近づくころには一時的ではあるが、経過が良い時期もあった。53 歳でピューリッツァ賞を受賞、そして 54 歳でノーベル文学賞を受賞する。しかし、2 度目のアフリカ旅行の事故が元で、体調が急激に悪化し、その後の作家生命に大きな影響を与えることになったことは周知の事実である。

### 隠蔽された暴力

1925 年に発表された『我らの時代に』は、ヘミングウェイの最初の短編集であり、作家活動の最初の作品集でもある。それらの最初に載せられていたのが「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp” 1924) である。当初「インディアン・キャンプ」の冒頭に置かれていた、タイプ原稿にして約 8 ページにわたる導入部分は、ヘミングウェイの死後に「三発の銃声」(Three Shots) というタイトルで、フィリップ・ヤング (Philip Young) 編集の『ニック・アダムズ物語』に収録された。Charles Scribner's Sons から 1972 年に出版されたもので、ヤングの編集によりニック・アダムズが主人公となる 24 篇の短編をクロノロジカルに 1 冊にまとめられたものである。「三発の銃声」はヘミングウェイの生前には発表されなかった 8 編の内の 1 篇である。以下のように、「三発の銃声」はヤング以降の先行研究では、ニックのイニシエーションの成否の物語ととらえている。

A typical Nick Adams story is of an initiation, is the telling of an event which is violent of evil, or both, or at the very least is the description of an incident which brings the boy into contact with something that is perplexing and unpleasant. (Young, *Reconsideration* 31)

Plainly his closing thought in “Indian Camp”—“felt quite sure that he would never die”—is wishful and self-protective. (Spilka, *Hemingway's Quarrel* 194)

They serve as necessary conditions for the rest of the sentence: *only* in the early morning *and* on the lake *and* sitting in the stern of the boat *and* with his father

rowing, could Nick “feel *quite* sure that he would never die.” (Smith, *Reader's* 39)

生前この作品が発表されなかったために、続く「インディアン・キャンプ」とともに語られることのなかった家族の問題と、ヘミングウェイが受け継いだ精神疾患を含む「遺伝」が隠蔽されることになったのである。またもうひとつ、生前にこの「三発の銃声」が発表されなかったことに着目すると、作者の理論による技法も浮かび上がってくる。

作品に語られることのなかった家族の問題と、ヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」に焦点をあてると、「三発の銃声」はヘミングウェイの体験した恐怖が明らかになった物語としてとらえることができる。この作品からヘミングウェイの体験した恐怖を考え直すに当たり、「三発の銃声」の内容をまず概観してみたい。

ニックの父親とおじのジョージと 3 人で森の中にキャンプにきた。夕食後、父親と叔父は釣り用のライトを持って夜釣りに出かける。舟を出す前に父親が、自分たちがいない間に、もし何か急用が起これば、ライフルを三発撃てば、すぐに戻ってくると言い出かけて行った。ニックはいつも夜の森は少し怖かった。テントに入り暗闇の中で服を脱ぎ毛布の間にくるまった。物音ひとつ聞こえなかった。だんだん恐くなってきた。ついには突然死ぬのではないかと怖くなった。2、3 週間前教会で「いつか銀のひもが切れるだろう」という讃美歌を歌ったのだ。ニックは自分がいつか死ななければならないとそのときはっきりと理解した。

彼は終夜灯の下に座って、『ロビンソン・クルーソー』を読みながら、いつか銀のひもが切れるに違いないという事実から気をそらそうとした。乳母にベッドに行かないと父さんに言いつけるわよと脅かされた。しかし朝まで玄関の明かりの下で本を読んでいた。

テントの中でその夜、そのときと同じ恐怖を感じた。夜以外はその恐怖を感じたことはなかった。そして 3 度銃を撃った。銃を撃って彼は落ち着いた。父と叔父が戻ってきた。叔父は釣りができなかったことに愚痴をこぼす。父は小さな子供は仕方がないとニックを擁護する。そして、物語は後の作品である「インディアン・キャンプ」へと続くことになる。この作品の中には明らかに物語とは異なった、ニックの過去の記憶が蘇ってくるところがある。それは、いつか銀のひもが切れるに違いない、そして死ぬに違いないということを考えないようにしているところである。

「三発の銃声」の構成を詳細にみてゆくと、短い作品ではあるがヘミングウェイの技法が浮かび上がってくる。一つ目は、物語の最初の部分 Nick was undressing in the tent. ... He had kept it out of his mind all day. (NAS 13) の 6 行と、物語の最後の二つのパラグラフの部分である Now he was undressing again the tent. ... “Put your coat on, Nick,” his father said. (NAS 15) とのその間に挟まれる、ニックの回想で構成されているいわゆるフラッシュバックである。その回想は That night he sat in the hall (NAS 14) で始まり、under the hall light until morning (NAS 14) で終わる 2 層の過去に分かれており、その部分はさらに深い過去の出来事になる。この物語の最初のパラグラフでは He felt very uncomfortable and shamed and undressed as

fast as he could. (NAS 14) とあるように、昨夜、恐怖に駆られてライフルを 3 発撃ったことへの何か居心地の悪さとその行動への恥じらいが表現されている。物語の構成は、ライフルを 3 発撃ったその翌日の夜に、テントの中で寝る準備をしている最中に昨夜のことが思い出され、「インディアン・キャンプ」へとつながるのである。このときにニックの感じる恐怖が描かれている。

He was not afraid of anything definite as yet. But he was getting very afraid. Then suddenly he was afraid of dying. Just a few weeks before at home, in church, they had sung a hymn, "Some day the silver cord will break." While they were singing the hymn Nick had realized that some day he must die. It made him feel quite sick. It was the first time he had ever realized that he himself would have to die sometime. (NAS 14)

ヘミングウェイの後の作品である「大きな二つの心臓のある川」(“Big Two-Hearted River”1925)、「異国にて」(“In Another Country”1927)、「身を横たえて」(“Now I Lay Me”1927)、そして、「誰も知らない」(“A Way You’ll Never Be”1933)などの兵士の物語で、これまでの先行研究では、ニック・アダムズの闇に対する恐怖は、戦争体験に由来するものと解釈されてきた。しかしながら、高野泰志は「後のニック・アダムズ物語で描かれる恐怖は戦場での負傷が原因とされているが、『三発の銃声』の場合、幼いニック・アダムズは戦争とは何のかかわりもない。まだ戦争体験のない幼いニックが、戦場で負傷兵ニックと似た恐怖にとらわれていることは非常に重要である。従来は当然のようにニック・アダムズ物語に一貫して現れる闇への恐怖は、戦争後遺症によるものと解釈されてきたからである」と考察している(高野、『神との対話』28)。高野が指摘するように、戦争恐怖症である不眠症や闇を恐れる原因が、青年時代を遡る幼年時代のニックにあるはずがない。

「三発の銃声」が生前に発表されることがなかったために、続く「インディアン・キャンプ」とともに、語られることのなかった家族の問題とヘミングウェイが受け継いだ「闇」が隠べいされることになったのである。そして、その受け継いだ恐怖の「闇」のことを考えないように、玄関の明かりがあるところで『ロビンソン・クルーソー』を読み続けるのである。

He was not afraid of anything definite as yet. But he was getting very afraid. Then suddenly he was afraid of dying. Just a few weeks before at home, in church, they had sung a hymn, "Some day the silver cord will break." While they were singing the hymn Nick had realized that some day he must die. It made him feel quite sick. It was the first time he had ever realized that he himself would have to die sometime.

That night he sat out in the hall under the night light trying to read Robinson Crusoe to keep his mind off the fact that some day the silver cord must break. The nurse found him there and threatened to tell his father on him if he did not go to bed. He went in to bed and as soon as the nurse was in her room came out again and read under the hall light until morning. (NAS 14, emphasis added)

some day the silver cord must break については、ラリー・グライムズ (Larry Grimes)、前田一平、高野泰志が指摘しているように、ファニー・クロスビーの「神の恵みに救われて」いう讃美歌の一節である (Grimes, “Religious Odyssey” 53 ; 前田、「三発の銃声」 62 ; 高野、『神のとの対話』 37-38)。「神の恵みに救われて」いう讃美歌は「伝道の手帳」の 1 節にあり、人の死を描いている (高野、41)。

この作品の中には、明らかに物語とは異なったニックの過去の記憶が蘇ってくる。それは、いつか銀のひもが切れるに違いない、そして死ぬに違いない、ということを考えないようにしていることである。ニックは夜の森の中ではいつも少し怯えていた。ボートのオール音が聞こえなくなり、物音一つしなくなった。いままたテントの外では炭が下火になった。Some day the silver cord will break. から some day the silver cord must break. へと物語は続くのだ。will break から must break へと続くこの変化は、銀のひもはいつかは切れるということから必ず切れるということへ、2 度の realized という語で明確に表現されている。

ニックは自分の死というものを思い浮かべることから、確実なことへとはっきり具体化すると信じたのである。それは afraid が very afraid へと変化し、やがて afraid of dying へと姿を変えるのと同様である。いやが上にも恐怖は増してくるのだ。そしていつか死んでしまうのだと悟るのである。さらに作品の中で、ニックは部屋に入らないとお父さんに言いつけますよと脅かされたにもかかわらず、再び部屋から出て終夜灯の下に戻って座り『ロビンソン・クルーソー』を読みながら、いつか銀のひもが切れるに違いないという事実から気をそらそうとした。

夜テントの中で暗く音もしないところでの死の恐怖を感じたのと同様に、明るいところで本を読んで死の恐怖を紛らわさなければならなかったのである。闇と無音が死を想起させた。その死とはすなわち、無 (ナダ) の世界である。作者ヘミングウェイは、ここで無 (ナダ) の世界の恐怖を、ニックを通して作品の中で表現したのである。このニックの恐怖はシェルショック以降の戦争後遺症での恐怖ではない。戦争体験のない幼年のニックが死の恐怖に怯えるのは、作者ヘミングウェイの体験させられた家族の問題なのである。ここに隠れている恐怖は罪を犯した者を罰する宗教的に厳しいものでもあった。ニックは、父によるその罰が死そのものを連想させるほどの恐怖に置き換えて描いていたのである。そしてその奥に潜む彼の避けることのできなかったものが、ヘミングウェイ家の世代間に渡り受け継がれていたのである。

## 受け継がれたもの

ヘミングウェイは、医者父クラレンス、音楽家母グレースの第 2 子で長男として生まれた。第 1 子は長女マーセリンである。ヘミングウェイ家は 8 人家族で、グレースの父ホールも一時期一緒に住んでいた。ヘミングウェイの先祖は 1630 年頃イギリスから渡ってきた。母グレースの両親もイギリス生まれである。ピルグリム・ファーザーズが、信仰の自由を求めて初めてアメリカの地を踏んだのが 1620 年であったから、イギリスからアメリカへ渡ってきた最初期の人たちに属すると言えるだろう（島村、『ヘミングウェイ』18）。クラレンスはラルフ・ヘミングウェイを先祖としたピューリタンの伝統を強く受け継いでいる。カードゲーム、ダンスのみならず、アルコールの飲酒や喫煙に至ってはもってのほかで許されるものではなかった。またモリス・バスキ（Morris Buske）が The Heavenly Father of the Hemingway tradition was a stern Old Testament God who rewarded good deeds and punished transgressors. (Buske, “Faces God” 74) と指摘するように、ヘミングウェイ家の伝統の父なる神は善い行いと罪を犯した者への厳しい旧約聖書の神であった。父クラレンスの good deeds については、「インディアン・キャンプ」に続く短編である「医者と医者の妻」の中の医者が、混血のインディアン、ディック・ボウルトンの妻の病気を費用を受け取らずに治療をしたことが描かれている（NAS25）。治療の対価としての費用を低額にしたり、またはその費用を取ることもしなかったことがうかがえるのである。サンフォード・マーセリン・ヘミングウェイ（Marcelline Hemingway Sanford）は無料で治療を施したり、ときには請求書を送ることもしなかったということに言及している（Sanford 30）。また、患者はクラレンスを信頼していたが、クラレンスは患者の悩みを抱え込み内に秘めてしまう傾向にあったとも言及している（Sanford 31）。善い行いをしているにもかかわらず、クラレンスは次第に心を病んでゆくのである。グライムズはクラレンスが受けた父アンソンからの影響を次のように考察している。

Clarence's early religious experience under his father's[Anson] influence registered heavily on him and made him most mindful of human sin and error and shaped him as melancholy, stern, and sober moralist. It is possible that Clarence's religious temperament could be described psychologically as acute depression, but the greatest psychologist of his own time, William James, perceived personalities like Clarence's in religious terms: He said they suffered from sick soul. (Grimes, “Religious Odyssey” 47, emphasis added)

父クラレンスがヘミングウェイの祖父から受けた宗教的体験は強い影響を及ぼし、グライムズは心理学上急性鬱病であると言及している。当時の哲学者、心理学者として意識の流れの理論を提唱し、アメリカ文学のみならず日本文学にも強い影響を与えた人物であるウィリアム・

ジェームズ (William James) は、クラレンスは sick soul に苦悩していると指摘している。この sick soulこそヘミングウェイ家に綿々と流れ続ける宗教観とクラレンスが受けた宗教的体験が強く影響している。その後、その sick soul はヘミングウェイ家で猛威を振るうことになるのである。

父クラレンスは鬱病的ともいえる sick soul で子供たちをしつけていたのである。モリス・バスキは、ヘミングウェイの一つ年上の姉マーセリーンによって書かれた伝記の出版されなかった原稿に光をあて、マーセリーンが家庭内で受けた体罰（仕打ち）の暗い描写について次のように言及している。

At times, in our youth it seemed we were spanked for almost anything and everything. There was no talking to us about it, no trying to understand us, or so it seemed to me, no effort to find why we had done thus and so ... If we had done what our parents or the servants considered being naughty — if we had been, as they consider, bad, we were spanked and no questions asked. I can remember when my mother and father would be away on a trip, and on the day their return I would say to the nurse girl or cool or whoever was in charge “Can I say I’ve been good? Can I say I’ve been good?” Because I knew that if I had to say had been bad, or had been naughty or had disobeyed, or if my parents asked on entering the house “Has Ernest been good? has Marcelline behaved?” and the maid said “Well, not always, she was a little naughty, she wouldn’t do just what I said sometimes,” without another word, we were simply taken to my father’s office, turned over his knee and spanked soundly, sometimes by hand, sometimes with a ruler, and sometimes with a razor strap... (qtd. in Buske 76)

子供たちがどれほど父の体罰を恐れていたかをうかがい知ることができる。子守りや料理人あるいは世話をするだれかに私はちゃんとしていたということを言ってもらわないと体罰が待っていたのである。またこういった父による体罰は珍しいことではなく日常に行われていたのである。

一方、母グレースの家庭では父ホールがオークパークの Episcopal Churchに通うとても信心深い人間だった。グレースは幼少期に猩紅熱に罹り、数か月に渡り盲目状態になった。しかし運よく再び視力が回復し、目が見えるようになったのは神のおかげであると強く信じた (Grimes, “*Religious Odyssey*” 44)。グライムズはグレースの神を心から信じ神との関係を感じるという宗教的な気質があると考察している。「医者と医者妻」では、その医者妻が、神の正しい思考によって真理を悟れば罪や病気、死は治療を行わずとも信仰によって消滅するという宗教を信じていることが描かれている (NAS 25)。夫が医者であるにもかかわらず、その横でクリス



チャン・サイエンスを信奉していることは皮肉なものである。

父ホールのリベラルなプロテスタント主義を受け継いだグレースは宗教的気質の特徴である感傷的な信心と感性的な信心を共に持ち合わせていたのである (Grimes, "Religious Odyssey" 45)。それはまさに healthy soul である。クラレンスの家庭内で荒れ狂う sick soul は healthy soul を持つ母グレースも止めることはできなかったのである。どんな些細な事でも体罰の対象となっていたからである。

My father awaited me in the living room, his back to the fireplace. His hands were clenched. His face red. Mother was there too, with a handkerchief in her hand. "I have told you I will not have dancing in my home. You are to promise me now that you will never do this wicked thing again. Promise and mean it. "I tried to explain that I was only being taught by kind classmates who felt sorry for me, as the only girl in the class who could not join in the class dancing. I said I had not danced with any boy. "But you wanted to dance. You would have learned and then next you would have been found in ----- dance halls. I will not have it. No matter what your mother says. You will now get down on your knees and ask God to forgive you." I knelt. I repeated the dictated words.... When I rose to my feet I saw my mother sobbing quietly in a corner of the room. She wouldn't look at my father. (qtd. in Buske 78)

クラレンスが学校へやってきて、彼女が女の子とダンスをしているのを見て、それがたとえ男の子でなくとも、ダンスをしているというだけで「すぐに家に帰るんだ」と言い、その後家庭での体罰が描かれている。ヘミングウェイ家では父親の体罰が些細なことで行われていたが、母グレースはそのときどのようにしていたのが、マーセリーンの原稿から読み取ることができる。そのときの母の姿は父の方も見ずただ泣いているだけで止めようとしなかったのだ。マーセリーンが父のいうことを聞かずダンスをしたために。止めることができないほど荒れ狂ったクラレンスがいたのだ。突然豹変する父クラレンスのことをサンフォードは次のように述懐している。

My father's dimpled cheeks and charming smile could change in an instant to the stern, taut mouth and piercing look was his disciplinary self. Sometimes the change from being gay to being stern was so abrupt that we were not prepared for the shock that came, when one minute Daddy would have his arm around one of us or we would be sitting on his lap, laughing and talking, and a minute or so later — because of something we had said or done, or some neglected duty of ours he suddenly thought about — we would be ordered to our rooms and perhaps made to go without supper.

Sometimes we were spanked hard, our bodies across his knee. Always after punishment we were told to kneel down and ask God to forgive us. (Sanford 31)

この行動はまさしく精神に異常をきたした者の行動である。クラレンスは自分の子供に対しては一切の妥協なく体罰を与えていたのである。またグレースはクラレンスの行動を止めることができなかった。まさしく、そこには善い行いと罪を犯した者を罰する宗教的に厳しいものがあったのだ。

ヘミングウェイの両親は、会派は違うがともにプロテスタント信仰の厚い家庭に育った。ヘミングウェイが4歳の誕生日を迎える頃から、父クラレンスに鬱病が発症していた。その後も不動産投資などの金銭のストレスでたびたび鬱病を発症し、パルノイアの症状も出始め、糖尿病と高血圧症にも悩まされていった。1927年には再び狭心症を発症し、糖尿病が重症化し、精神不安定となり、28年12月に銃で自殺している。すでにカトリックに改宗していたヘミングウェイは父親の自殺が、自殺を戒めるカトリックへの関心を強めることとなった。カトリックでは命は神からの賜物であり、いつ死ぬかというのを決めるのは神であり、自殺は加害者と被害者が同じであるというだけで、根本は殺人である。したがって自殺は神を冒瀆するのとともに挑戦でもあるため、許されないものとして考えられているのである。歴史上、一時期は自殺者の葬儀ミサも行えなかった。

父クラレンスから息子のアーネストへ、そしてアーネストの二人の妹アーシュラとライセスターへと世代を超えて鬱病の遺伝的傾向があったことが考えられる。アーネストの三歳年下の妹（6人兄弟の次女）は最もアーネストのお気に入りの妹だった。1919年、アーネストのが戦場から戻ってきた際に変力になったとされているが、アーネストの自殺の5年後の1966年に強度の鬱病で服毒自殺を遂げている。6人兄弟の末っ子レスターはアーネストと16歳違いの弟である。そのレスターも糖尿病と強度の鬱病でやはり1982年にピストルで自殺している。

精神科医のファラー（Andrew Farah）によれば精神疾患は間違いなく世代から世代へ受け継がれ、長期における鬱症候群は治らない。現代においても鬱病性障害が治療されないままにいる時間が長いほど治癒は困難であるとしている（*Hemingway's Brain* 11）。また、鬱病をもつ親と生活を共にする子供は否応なしに親の異常体験に巻き込まれる。そのため、子供の精神構造に大きく影響すると考えられている（長江 83）。

#### まとめ

ヘミングウェイが「三発の銃声」を削除し、生前発表しなかったのはヘミングウェイの考える技巧もさることながら、父の存命中に、家族の中を吹き荒れた恐怖の体罰という名の出来事

を書くことは憚られたに違いない。生前に伝記を書かれることに対して強く拒絶していたヘミングウェイが、家庭内の暴力を描いた作品を発表することはできなかったはずである。If he wrote it he could get rid of it. He had gotten rid of many things by writing them. But it was still too early for that. There were still too many people. (NAS261-62) 様々な人に様々な影響がでるため発表することはできなかったのである。ヘミングウェイは、宗教に一貫して助けを求めている父クラレンスの持っていた sick soul の恐怖から逃れるために、夜寝ないで本を読んだりさまざまな方法で考えないようにしていたのだ。しかしその sick soul の恐怖は、すでにヘミングウェイの中に形として宿し始めた時期でもあった。

sick soul の恐怖は、父ホルのリベラルなプロテスタント主義を受け継いだ母グレースの宗教的気質の特徴である、感傷的な信心と感性的な信心である healthy soul をも凌駕し打ち碎いていたのである。精神疾患は間違いなく世代から世代へ受け継がれていた。鬱病をもつ父親と生活を共にするヘミングウェイ兄弟は否応なしに親の異常体験に巻き込まれていたのである。つまりヘミングウェイをはじめとする子供たちも例外ではなく、彼らの精神構造に大きく影響していたと考えられるのである。この父の恐怖をヘミングウェイは「三発の銃声」に描きこんでいたのである。

「医者と医者の妻」の中で、お母さんが呼んでいるよと父が伝えるも、父と森の中へ入ってゆく。穏やかな物語の終わりの場面ではあるが、当時の家庭内を考えると父を選択することしかできなかったと考えられるのである。子供なりの考えと選択だったと考える。その父に従うということの裏には、従わなかった場合は罰が待っているということである。そんな子供の繊細な神経が「におい」というメタファーとして「父と子」という作品には描かれている。

Nick loved his father but hated the smell of him and once when he had to wear a suit of his father's underwear that had gotten too small for his father it made him feel sick and he took it off and put it under two stones in the creek and said that he had lost it. He had told his father how it was when his father had made him put it on but his father had said it was freshly washed. It had been, too. When Nick had asked him to smell of it his father sniffed at it indignantly and said it was clean and fresh. When Nick came home from fishing without it and said he lost he was whipped for lying. (NAS265)

「におい」を嗅げばその「におい」を発するものが想起される。「におい」それ自体の性質を、ものとの結びつくことなしに表現することは容易ではない。桜の花の香りはどんな香りですかと質問されても答えようがありません。そこで、β-フェニルエチルアルコールとクマリン(桜餅の香り)とが混ざった香りだと答えています。「におい」は言葉で説明することが非常に困難なのです。ですから成分名で答えざるを得ません(荘司 8)。

ヘミングウェイはあえて作品の中で、「脂のにおい」、「かび」、「汗」、「土」、「加齢臭」、「湿った埃」、「父の体臭」などとは書かず、つまり「におい」を発するものとその状況を描かず、ただsmell（におい）とだけ描いたのである。作品を読む者自身がそれぞれ想像するであろうその「におい」を、一般的なものと誘導した状況を描き出している。その意味で、ヘミングウェイはここでsmellという語を、あえて使ったと考えられるのである。なぜならテキストからはsmellをあたかも悪臭であるかのように表わし誘導し、すなわち負のイメージとして描き出しているからである。しかしながら、smellという語が表現するのは、芳香から悪臭までなのである。つまり読み手は負のイメージへと導かれているのである。

「におい」の素材を限定して表現するための方法はメタファーである。その素材とは父のことである。父を嫌っているということを婉曲的にメタファーを用いて描いたと考える。ニックは自分に与えられたwhipが嫌だったのである。彼をsickにさせたのである。ヘミングウェイ家で行われていたwhipの様子を考えればニックが嫌う理由も明白のものとなる。作品の中のニックは父のsmellをhateしているのだ。その父のsmellこそ宗教上のしつけという名のもとに、ヘミングウェイ家で行われていたまさに父のwhipそのものなのである。その「におい」を嗅げばその「におい」を発するものが想起されるのだ。つまり父の「におい」はwhipがイメージされるのである。その父のwhipに対して殺したいほどの欲求が高まる。しかし、ふと気が付けばいつときではあるが、狂気にかられた自分がいやになると同時に怒りも収まっていく。その描写が「父と子」に描かれている。

Afterward he had sat inside the woodshed with the door open, his shotgun loaded and cocked, looking across at his father sitting on the screen porch reading the paper, and thought, "I can blow him to hell. I can kill him." Finally he felt his anger go out of him and he felt a little sick about it being the gun that his father had given him. (NAS265)

ニックの受けた父の whip に対する怒りで、弾を込めたショットガンで父に狙いを付け、殺してやれるんだけど、と思うと怒りはおさまるのだが、父に狙いを付けたその銃は、父から譲り受けたものだということを思い出し、気分がわるく（sick）なったのである。この心の動きをヘミングウェイは「医者と医者妻」にも描き出している。妻に強く言われるのであるが、それには答えず、自室で銃に触れる場面である。

Her husband did not answer. He was sitting on his bed now, cleaning a shotgun. He pushed the magazine full of the heavy yellow shells and pumped them out again. They were scattered on the bed. ... His wife was silent. The doctor wiped his gun carefully with a rag. He pushed the shells back in against the spring of the magazine. He sat with the gun on his knees. He was very fond of it. (NAS25-6)

「医者と医者の妻」では、ライフルを磨き、そして弾を装てんし撃つことなく弾を吐き出すと、怒りが静まることが描かれている。銃を手にして撃つ真似をすることで怒りが静まるのは、ニックが父にライフルを向けて、「あいつを地獄に吹っ飛ばしてやれるんだ。殺してやれるんだ」、という行動をする子すなわちヘミングウェイと、多く語らぬ医者すなわちヘミングウェイの父が示す同じ思考が、世代間で物語を通して受け継がれていると考えられる。それは、『ニック・アダムズ物語』の最初の作品が「三発の銃声」で始まり、そして「医者と医者の妻」へと続き、最後の作品が「父と子」であることから、書かれた時系列からもそれが考えられる。

ヘミングウェイが父と子にそれぞれ銃に対して描いたことで、同じ思考が流れていることが露呈するのである。すなわち父クラレンスの sick soul が、息子ヘミングウェイへと受け継がれていたのだ。ヘミングウェイは、宗教に一貫して助けを求めている父クラレンスの持っていた sick soul の恐怖から逃れるために、夜寝ないで本を読んだり、さまざまな方法で考えないようにしていた。しかしその sick soul はすでにヘミングウェイに内在し、受け継がれた「遺産」として形を作り出していたのである。

#### 引用文献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scribner's, 1969.
- . *Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton: Princeton UP, 1956.
- Bundy F. James, *Fall from Grace: Religion and the Communal Ideal in Two Suburban Villages, 1870-1917*. Brooklyn, N.Y.: Carlson Publishing Inc. 1991. 90.
- Buske, Morris. "Hemingway Faces God." *The Hemingway Review* 22.1 (Fall 2002): 72-87.
- Dearborn, Mary V. *Ernest Hemingway: A Biography*. New York: Alfred Knopf, 2017.
- Farah, Andrew. *Hemingway's Brain*. Columbia: U of South Carolina, 2017.
- Grimes, Larry E. "Hemingway's Religious Odyssey: The Oak Park Years." *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Ed. James Nagel. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 37-58.
- Hemingway, Ernest. *Across the River and Into the Trees*. 1950. New York: Scribner's, 1996.
- . *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition*. 1987. New York: Scribner's, 1998.
- . *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.

Sanford, Marcelline Hemingway. *At the Hemingways: With Fifty Years of*

*Correspondence between as Ernest and Marcelline Hemingway*. Moscow: U of Idaho P, 1999.

Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K Hall. 1989.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1990.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: Pennsylvania State UP, 1966.

今村楯夫『ヘミングウェイ』（勉誠出版、2005）

荘司菊雄『においのはなし―アロマテラピー・精油・健康を科学する』（技報堂、2001）

高野泰志『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』（松籟社、2015）

―『引き裂かれた身体―ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』（松籟社、2008）

長江美代子、土田 幸子「総説 精神障がい親と暮らす子どもの日常生活と成長発達への影響」『日本赤十字豊田看護大学紀要』8 巻 1 号（日本赤十字豊田看護大学、2013 年）83-96 頁

前田一平「「三発の銃声」に隠された不安の源―「あいのこ」と「銀のひも」」『ヘミングウェイの時代―短編小説を読む』日下洋右編（彩流社、1999）45-75 頁